



私の歩んだ道，そしていま思うこと

高橋 一夫

東北医科薬科大学皮膚科学病院教授

私が入局したころの横浜市立大学皮膚科は活気のある教室だった。中嶋弘教授は就任2年目で臨床能力，皮膚病理組織の知識ともに豊富だったし，希望すれば留学もさせてくれた。免疫学に明るい池澤善郎先生，石井則久先生をはじめ，教授候補がたくさんいらしかった。多くを学び影響を受けた私であったが，先輩たちに恩返しできたか，後輩たちに何を伝えてこられたか，忸怩たる思いがある。

私はいま仙台にいる。ここ10年で3度目の異動となった。お陰で引っ越し上手となった。コロナ禍での話題は尽きないが，個人的には内食，家飲み，音楽鑑賞，散歩が中心の生活へと一変した。順応性があまりよくない自分は，公私ともに苦戦を強いられることも少なくない。自分の取り柄といえば「これはどうなっているんだろう，どうしてなんだろう」とresearch mindsをもって掘り下げることで，面白い切り口でいろいろとやってきたが，これまでのことをコツコツと形にして，残し伝えていくべきと改めて気づかされる。

この機に『皮膚科研修医ノート』（診断と治療社）という北海道大学名誉教授・清水宏先生が編集された書籍を久しぶりに手にした。2001年に出版されたが，私が大学に戻って間もないころで，後輩たちによい皮膚科医に成長してもらうためにどうしたらよいかの指南に使わせていただいたことを思い出している。本書では，より質の高い皮膚科医であるためには①皮膚病理が読める，②全身管理ができる，③手術

ができる，④レーザー治療ができるとある。また，「世界一流の研究を目指して」ともあり，清水先生の本日から「世界」とついてはいるが，初めから世界を目指すさなくとも，ちょっとした研究でも始めてみることの大切さ，順当にうまく結果が出せることは少ないが，根気よく続けることの大切さが述べられている。

自分の過去を振り返ってみると，興味や好奇心をもてたものを人前に出せるように形にして，後輩にまとめてもらったり，自分でまとめたりしてきた。これらの経験を積むことで，守備範囲は明らかに広がった。オペ以外なんでもある程度のことはできることを目指した。毎週，病理組織標本はほぼ全例検討したし，天疱瘡やTENの患者がMRSA敗血症などになっても積極的にみせていただいていた。当時の病棟医の小野田雅仁先生とは「感染症科からいわれたままにせずに，皮膚科としての意見も入れてディスカッションできるようにしよう」とよく話していた。ただ誇れる話ばかりではなく，逆説的だが，1つ2つの専門領域を世界レベルに仕立てることはなかった。

大学病院や勤務医目線からの話ばかりになってしまったが，年齢を重ねてみてよく思うことは，志高く情熱と行動力をもって活躍できる人を育てることはとても重要だし，必要だということだ。若いころはいろいろとチャレンジして多くを経験して，これぞと思う道を満身の力を込めて進んでもらいたい。